

農林水産大臣賞

株式会社芦別RICE

(北海道芦別市)

玄米

・ななつぼし
・ゆめぴりか

・シンガポール

・香港

・アメリカ

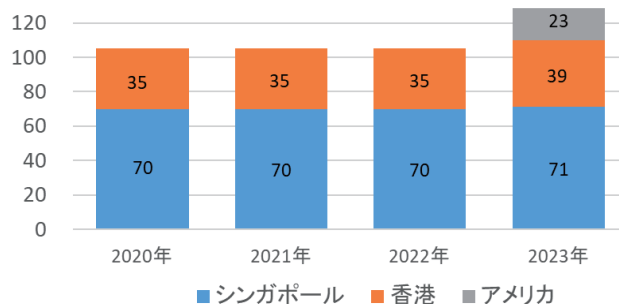
芦別の米が海外で絶賛！ 芦別産ブランドを海外へ

取り組み内容

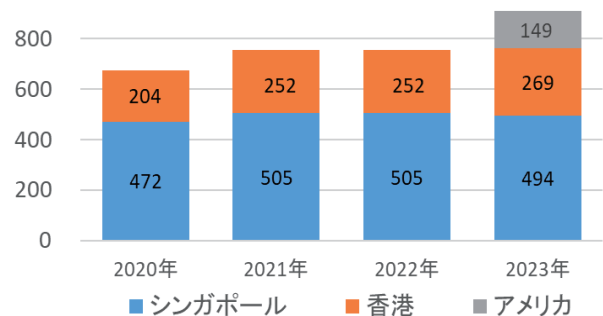
- 芦別市中心に生産する「ななつぼし」と「ゆめぴりか」の玄米を輸出。輸出事業者と連携し、現地のニーズや状況を生産者へ提供。行政団体とも情報共有し、産地を育成。GFPにも参画。
- 国の登録検査機関（もみ、玄米）となり、輸出玄米は農家生産者毎に検査。農家毎に検査することで、「美味しいお米作り」に対する生産者の意識向上につながり、「北海道芦別産」をブランドとして届けている。
- 戦略的輸出基地指定を受け、地域の農家へ参加を呼びかけ、輸出に取り組む農家を増やし、ロットを確保。（設立時3人→2024年24人へ）。参加希望の農家には、生産調整による輸出取組みへの支援、効率化策等の技術支援を行い、輸出参加のハードルを下げている。

輸出実績の推移

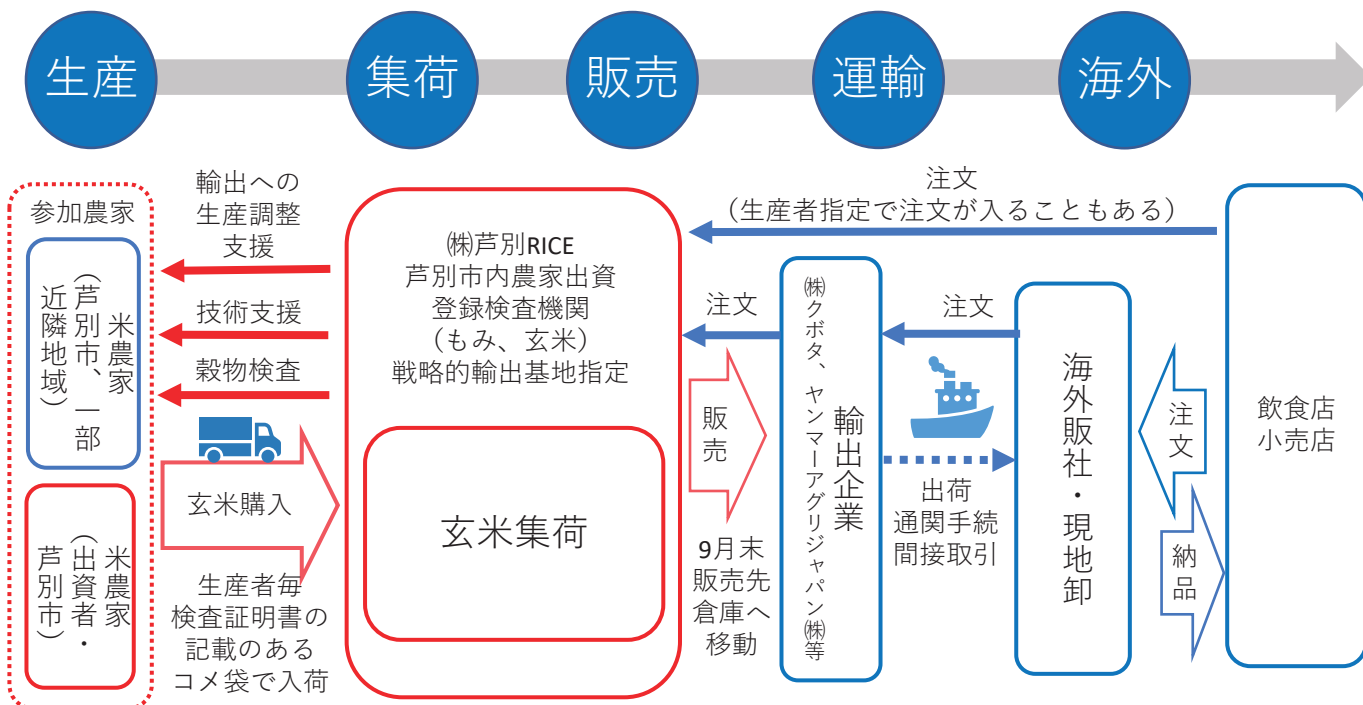
国別輸出金額の推移（百万円）



国別輸出量の推移（トン）



輸出の仕組みチャート



輸出に取り組んだ背景

- 日本の人口減少が進む将来を案じ、海外展開を志す。共感する農家仲間 3 人で2011年に農業生産法人設立、香港を視察するも輸出に至らず。その後、芦別市役所から「香港から米の要望がある」ことを聞き、初輸出へ挑戦を開始した。2015年に株式会社に変更。
- 米の輸出量を確保したい(株)クボタより声がかかり、2017年シンガポールへの輸出開始。周囲の農家も輸出に関心を持ち始め、輸出用米の生産を開始し、当社の取組みに参加。2020年には戦略的輸出基地の指定を受け、輸出が拡大。徐々に参加する農家が増え、輸出用農地が2015年1haから2024年には228haに拡大している。

課題と解決のポイント

👍 想いを伝え続ける

国内の人口減少で将来的に米があまる不安。1998年にJA芦別が合併によりJAたきかわとなり、芦別の特産品がなくなり、芦別の地で生産する誇りがなくなる懸念。

農家 3 人が集まり、海外展開を志し、輸出のための法人設立。想いを伝え続けることで市役所から、海外からのオファーを紹介され、挑戦。芦別をブランドとして展開したい想いは市役所も同じであり、海外へ「北海道芦別産」の米の出荷を開始した。

👍 地域農家の意識改革

規模拡大にはロットが必要。輸出経験のない地域農家には海外展開は現実的でなく、現役世代が取組もうとするも、親世代は「できっこない」と輸出に後ろ向き。

周辺農家の理解を深める説明会を開催。生産者と共に現地飲食店を訪問。自身の育てた米が「美味しい！」と絶賛され、輸出に前向きに。それを見た他の農家も輸出を志し始めた。輸出への参加農家は2024年に24人となった。

👍 生産性向上支援

海外からの需要に応じていくためには、農家のなり手が不足する中でも輸出に取り組む農家が効率よく輸出用米を生産できる体制を構築する必要がある。

参加農家へ、J-クレジット等温室効果ガス抑制の取り組みや、生産性向上のための技術提供及び農薬資材等の共同購入を支援。無人トラクターやドローンによる農薬散布等、少ない人手で生産性を向上させる技術等、情報提供し支援。



▲ 芦別RICE出資農家の水田
大雪山系の雪解け水や、泥炭の少ない地質、寒暖差より美味しいお米が生産できる



◀ 9月末には収穫された輸出用米が倉庫にいっぱいになる

生産者毎に検査し、生産者の名前入りの袋で海外に届く。指名買いとなることも ▶



現地飲食店から生産者に絶賛の声をいただいた。 ▶

◀ 出荷の様子



▲ ドローンによる農薬散布等、技術面より農家の効率化を支援



今後の展望

- 香港やアメリカから、それぞれ100 t の精米購入のオファーがあり、集荷・精米・保管・出荷を一元管理できる米定温貯蔵調整施設を建設予定。HACCP認証取得及びFDA登録認証による付加価値向上を目標とする。
- 精米の輸出は、冬の期間の常温輸送を検討中。令和6年度に物流テストを実施し、顧客の求める質を提供できる最適な輸送手段を決定する。